

三
十
夜
三

^ 13
3172
3止



3118
8

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

深山
み
か
か
か
か
か
か
か
か

昭和九年九月九日
晴末

門 へ 13
3172
巻 3

山吹のいなね色
紙のり

お七 逢染 戀私衣初編下
吉元

小笠釣翁著

第五回 山吹のいなね色

端あきのののわらトとわや傳者も無双乃あおま
のあまきども遊所より立帰望る時賊のち入
理不尽しくおしをひきくるま下堪刃心をす賊を
返らうし一功立しをるの情ぞ後る乍元の悪公を

丹清

可七下

そつてもあつてその上命の恩あまは何ぐさくもか
に考ごがひつて老う親のゆるさぬ不表のあつた
日ごうふせぬ氣ありとををうのふ清免あつて外
又何ありとも思ふるの志中うもあつんと志を
とけつひひ言へををあつたあつた命の親あつ
おをゆるさぬの功あつたあつたあつたあつた
てむごうごうのうのうのうのうのうのうのうのう
困りごうそつてもあつたあつたあつたあつたあつた

父母めもとまうりあつたあつたあつたあつたあつた
うもあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
年ご一會のあつたあつたあつたあつたあつたあつた
夏あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
のむことありあつたあつたあつたあつたあつたあつた
さうあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
たるあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
もあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

うら^とも^れは^中の^行ね^をあ^らと^あら^めい^まう^ど
 の^友達^{とも}も^突合^を止^め祿^の入^り又^ちう^らん^とあ^らう^ど
 せ^んび^を悔^發起^いう^たり^まい^こぞ^は上^身の^うこ
 ち^らう^あめ^もあ^まぶ^いう^めも^さう^けた^る十^分あ^がら
 せ^どの^むこ^よし^くあ^らう^んや^さま^まを^あめ^他人
 ぐ^もあ^く旧^友あ^らど^の亡^らん^のち^中ぐ^も水^入ら
 ず^うく^うら^んと^あぞ^ける^を他^他の^涙あ^らま^とい^ふ
 ぬ^ぞを^かた^らい^あめ^まし^らま^うす^いと^いふ^簡乃

あ^らた^年の^りう^らせ^うあ^らめ^あく^かり^うと^の身^か
 め^くう^くも^たこ^んち^る度^を云^ひく^うと^腹も^ま
 ど^りや^とま^ら先^法盗^賊の^のう^らい^一時^あの^き程^を
 す^らひ^うる^功を^思ひ^うら^ひ中^あり^と思^ひけ^まら^うと
 と^和ら^うふ^あら^ずど^也男^もま^りま^りあ^らぬ^あん^その^甥
 あ^らま^わら^まら^うと^一恰^好と^もか^七又^相愛^の女^夫
 ち^まを^いま^うた^の親^のち^まあ^らう^あら^う度^あら^うを
 不^ふむ^とを^さが^んう^の何^うの^ちま^あら^うも^ま

と三四年もたち^まつ^たる^るを^を見^みす^る免^えて^の後^のも^も格^く別^{べつ}
中^{ちゆう}ご^ごや^やう^うく^くは^はあ^あら^らの^のう^うや^やう^うと^とを^をか^か七^{しち}が^がむ^むあ^あよ
せ^せん^んと^と六^{ろく}回^{かい}を^を志^しど^どの^のあ^あら^らは^はひ^ひの^の前^{ぜん}組^{ぐみ}合^あそ^その^の
外^{がい}の^の免^{めん}え^えも^もと^とう^うく^く女^{にょ}の^のこ^こと^とう^うく^くお^おや^やく^く子^こ前^{ぜん}乃^の
血^ち目^め願^{ねん}負^ふめ^めく^く日^{にち}は^は不^ふ身^{しん}の^のち^ちの^の傳^{でん}吉^{きち}を^をば^ばら^らく^くよ
内^{うち}の^のむ^むと^とよ^よせ^せり^りと^とあ^あら^らと^とあ^あら^らく^く六^{ろく}回^{かい}を^を志^しど^どの^の夫^ふあ^あら^ら
ら^ら養^{やしやう}ふ^ふと^とい^いひ^ひと^との^のこ^こら^らが^が身^みや^やう^うふ^ふま^まら^らせ^せう^うめ^めく^く世^よ
の^の免^{めん}え^え入^{いり}の^のさ^さげ^げす^すも^もい^いく^くあ^あら^らや^やう^うく^く附^{つけ}節^{せつ}を^を

ま^まの^のべ^べー^ーそ^その^の内^{うち}念^{ねん}く^く此^{こゝ}身^みの^の身^みの^のち^ちも^も見^みえ^えら^らけ^けあ^あを^を
早^{はや}も^もう^うく^くも^もと^と云^いは^はれ^れが^が傳^{でん}吉^{きち}の^のあ^あら^らう^うが^がや^やさ^さう^うい^いは^はれ^れ
を^をそ^その^のち^ちう^うか^かの^のあ^あら^らと^とう^うく^くも^も恩^{おん}を^をう^うけ^けま^まら^らせ^せ
と^とた^たけ^けや^やう^うと^と免^{めん}の^のう^うく^くま^まら^らせ^せ子^こめ^めも^もあ^あら^らせ^せま^まら^らせ^せま^まら^らせ^せ
所^{ところ}の^のあ^あら^らを^をお^おひ^ひの^の中^{ちゆう}回^{かい}を^を志^しど^どの^の人^{ひと}も^もと^とり^りま^まら^らせ^せま^まら^らせ^せ
が^が実^{じつ}意^いと^とる^るの^のあ^あら^らり^りと^とあ^あら^らう^うく^くの^のあ^あら^らり^り
理^りの^のあ^あら^らを^をま^まら^らせ^せま^まら^らせ^せま^まら^らせ^せま^まら^らせ^せま^まら^らせ^せま^まら^らせ^せま^まら^らせ^せ
乃^のち^ちと^とあ^あら^らう^うく^くや^やう^うと^と回^{かい}を^を志^しど^どの^の人^{ひと}も^もと^とり^りま^まら^らせ^せま^まら^らせ^せ

ようー^ちころが^ちはく^ちらうそあ^ちをむこめ^ちと^ち我^ち國^ちへ^ち水^ちで^ち言^ち
 むら^ちと^ち云^ち教^ちせ^ちを^ちよ^ちし^ちく^ち志^ちら^ちが^ち旧^ち徳^ちの^ちへ^ち
 ぢき^ちく^ちに^ちま^ちす^ちべ^ちと^ちま^ちこ^ちを^ちを^ち入^ち合^ちせ^ち旧^ちを^ち
 衆^ちが^ちひ^ちと^ち一^ち間^ちぬ^ち灯^ち火^ちの^ちあ^ちと^ち本^ちよ^ちま^ちく^ちあ^ちる^ちを^ちが^ち
 乃^ちま^ちく^ちあ^ちら^ちび^ちの^ち衆^ちの^ちあ^ちり^ちち^ちと^ちは^ちあ^ちせ^ちう^ちか^ち
 ら^ちん^ちが^ちせ^ちら^ちち^ちー^ちと^ちく^ちご^ちさ^ちら^ちん^ちや^ちと^ちま^ちく^ちを^ち旧^ちを^ち衆^ちの^ち
 か^ちひ^ちと^ち女^ち房^ちよ^ちう^ち徳^ちを^ち衆^ちが^ちむ^ちり^ちあ^ちる^ちむ^ちす^ちの^ちぞ^ちま^ちく^ちを^ち衆^ち
 ち^ちま^ち居^ちた^ちれ^ちが^ちあ^ちま^ちあり^ちと^ち推^ち量^ち一^ちく^ちま^ちく^ちを^ち衆^ちの^ちぞ^ちま^ちく^ちを^ち衆^ち

さあ^ちら^ちぬ^ち体^ちぬ^ちく^ちむ^ちら^ちぬ^ちの^ち中^ちぬ^ちく^ちわ^ちく^ちま^ちり^ちー^ち
 た^ちの^ちま^ちく^ちり^ちあ^ちま^ちの^ちや^ちど^ちま^ちく^ち大^ちの^ち恩^ちも^ちあ^ちま^ちを^ち
 何^ちが^ちま^ちく^ち言^ちぬ^ち先^ちく^ち衆^ち知^ちる^ちの^ちと^ちひ^ちひ^ちけ^ちま^ちく^ちを^ち
 度^ちぬ^ちも^ちよ^ちう^ちの^ちえ^ち何^ちら^ちあ^ちら^ちず^ちや^ちが^ちま^ちく^ちま^ちく^ちを^ち
 よ^ちと^ち言^ちけ^ちま^ちが^ち否^ち々^ちや^ちあ^ちる^ちを^ちも^ちあ^ちく^ちま^ちま^ちの^ち心^ちを^ち
 の^ちま^ちま^ちー^ちう^ちた^ちく^ち口^ちく^ちー^ちも^ち人^ちぬ^ちあ^ちわ^ちぬ^ちの^ちま^ち
 む^ちも^ちよ^ちま^ちの^ちり^ち外^ちの^ち口^ちけ^ちでも^ちる^ちー^ちま^ちの^ち後^ちこ^ちこ^ち
 ー^ち今^ち迄^ちの^ち身^ち持^ちま^ちあ^ちら^ちり^ちあ^ちま^ちま^ちの^ち存^ちま^ちぎ^ち

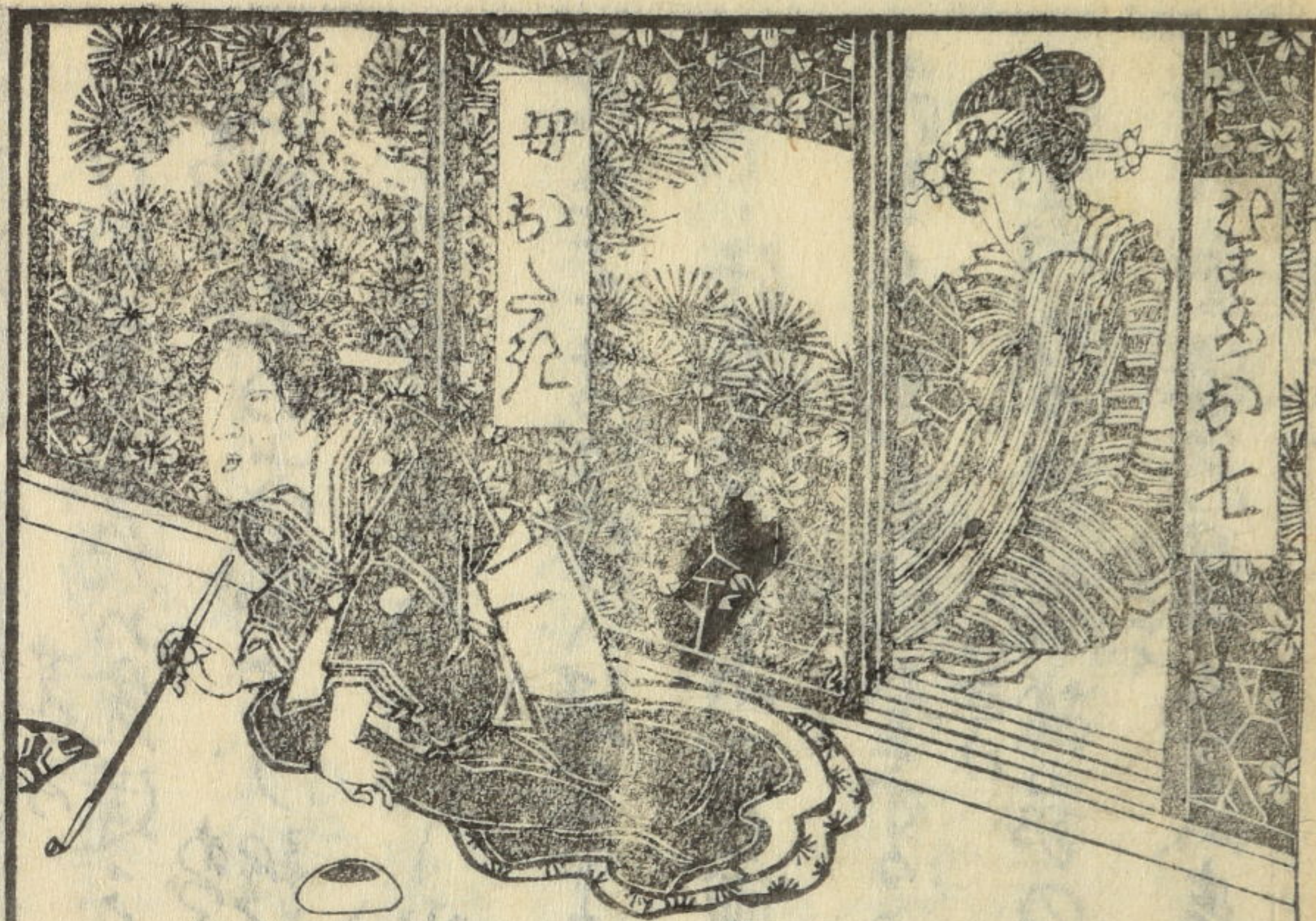


てとあらんせん先法せん盗賊とうぞくの入りたるいとききの功こうをおび
 此こふせうふせうでもあらうがいのめめのか七しちといいと夫あう婿ふは
 一いこの家け督とくを也やづりづりぬぬままささああるるををこの後のちららま
 ぐぐも血ち指さを改かめめ両りやう親しんへ孝かう初しつをを一い世せ間かんのう敵たかも
 見み返へんさんさんの美ぎ何なにぞぞ此これれ公こう下げされれといいぬぬぞぞ回まわ
 兵へい衛ゑもかかひひくく公こうぬぬるる変へんるるままををととくくととままららここににけ
 扱あららぬぬ中ちゆうううああるるややどどここままととりりとと血ちゆう統とうととちちぢぢととど
 家けにに付つくく妻つまたたききととぬぬををちちののそそををここおお七しちととまま

家け付つののいいままののみみくくややここ先せん回まわるる事ことどどののぬぬれれののつつ
 ききああままががののぞぞみみくくもも誓ちかふふすするる苦くああままとと今いまややをを
 のの能のうりりちちああままららるるのの先せん祖ぞのの家けととくくのの嗣つぎせせらられれず
 そそもも向けう後ごききららとと悛あきらむむといいふふののああららがが何なにののりりのの
 とともも眞まこと太たいのの功こうととぬぬののひひああるるあありりああららうう一いそのその功こうをを
 ささたたよよとと自みづからら功こうよよららるとといいふふちちととああららぬぬ
 中ちゆうううあありりおおててまま入いるるととぬぬららぶぶくく一いくくののどどかかくく



けやまのまじり 回兵衛の
 武多忠とひとことあり
 ぬ ぬとあり 度々
 初めいしく 酒をの 業
 のま 二のま ん ぬとあり
 ぬのこの武多忠を 業
 度ぬく 浪人しくる 己が
 ぬまぬの 唐立 遂作と



緒方へぬ 十百の金と成て
 世渡りぬるぬ 構中乃
 味方ぬ門 熟業ぬく 借
 のくする中 ちまがやま
 やぶる 三百支 借りのけ 得
 業の代 呂物をまよひ 業
 外 間屋の 構あふつらひ
 かうくこのまをばき

志よかかく公易くハあるやも死ぬ旧を浪入せ
とみき
 一ハありの遂作るがまは先ゆく名 旅さるるが
すせう
 只武吉衛が素性を包て後うらの町人の法より
のち
 ぐゆるふ公をゆるし後の禍を醸せしはうそぞり
 するえり

第六回

初恋ののひるる業

元来武吉衛も貪欲のよふ好色ののりあまを
とらふ
 旧名衛が娘お七がやうとあどるけれども容貌乃

うるふかぬ懸恋し何ぞぞふぬ入まんと公
えん
 の内ぬお七をめあてた志をく、お祐おどふ乃
あま
 通ひたりとさくも公がけても殖るのの借金あま
あま
 旧名衛も日おろ公が子よき男ぬくまのとあまを
せのり
 六十の老功あまを何ひとら費もあくと世利よ
あま
 老練たまごとの時の災難もせんうまくと不意に
あま
 盗賊ぬ遇るうぬあうくの物入りまくとそのう
 傳吉ぬゆすられ莫大の金まを失ひたかたをど

この上もえいあふよのまうらぶやうの代再興せん先
回老翁へも孝公あり先祖へも義理とせうと先支
人の心せしお七ふよりくやまひんと流るるを物
けまを流るる門は辰を武兵衛お告ぐるゆぞ先ハ
お親と支得公ありお七おむまめのお七とよ孝実
お七が志しひもみやうとひそふよろまおび樂
けまさく回老翁へある疾妻とろともお七ふえやう
お七もよそふ十五文芸年ころよまお七とらんと撰

お七内あの日辰公お七武多翁とよめらふお七とよ
少一ちがひ二十八九ぬもあらんぐらふの又ぬあぬ
ふた見路の人ありその上流るる門の媒あり
お七のふあそくあらんぐらふ十かのをるるお七の
あまふ先あの人を智ぬせんとお七ありあう一生
連係夫ゆふぬぬが公かかんお七あやととまを七ハ
あまう頭とらあまうお七うらやあまうらあまう
うらけあ何もあまうあまうあまうあまうあまう

丁
一七

眠藏めんぞうのあちこちある小座敷きざしの男あがり嬌まごる声こゑの
 物讀ものよみの声こゑききのえろまへ何なにかあゝ止とどま板塀いたへの
 節ふし穴あなより覗のぞきみるに十六七じゅうろくにんをうりの少年せうねんのやま
 髪かみ立たちるが見臺けんたいめ向むかひ書かをひくおくるその顔かほ色いろ
 優やさみさきくちあつと威おありく何なんなる男おとこ人の子こえ
 見えず由よしある武士ぶしのゐると見えなくは時ときめめく
 か七ななも廿ふためとかる少年せうねんもわりのうよとむむどかよ
 初はつく巻まきの種たねをぞ時ときそめくる是これよりあ親おや不ふ然ぜん

く月つき糸いとのを日ひ糸いとのめ改かへ指さしくふ男おとこあひるまはかの少せう
 見けんぬののそものしく物もの喜よろこぶめ対たいず何なんとあうら
 ちくくくくくおる俵はたけをすきかたをくくまどはまをま
 りお七ななはあまの法はふおまへのそびりあふもあうく
 名なかれやままが何なにぞ知しよあひておりぐあふるのあお
 ぎろまきうのいおあもこくく十じゅうめおあふんそのあう
 お度どもあふさうなるのあひくせんとおちのぐくそれあ
 ちくくくあつてくまのあふなうらうらうと

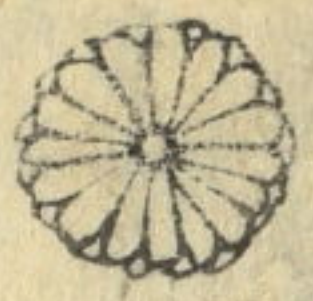
此際おつ一きくこのままうちあがりお祈お祈りておまゝおまゝ一きくおまゝなりと
 するおまゝくむ七おまゝの敷おまゝあつたおまゝうおまゝのおまゝあつたおまゝうおまゝのおまゝあつたおまゝ
 さらおまゝもおまゝをおまゝぐおまゝくおまゝ一おまゝきおまゝぐおまゝうおまゝらおまゝつおまゝぞおまゝやおまゝをおまゝきおまゝぐおまゝのおまゝ僕おまゝのおまゝ妻おまゝ
 をおまゝあおまゝぶおまゝ板おまゝ堀おまゝくらおまゝ不おまゝ斗おまゝ埴おまゝるおまゝんおまゝ一おまゝ小おまゝ性おまゝ荒おまゝのおまゝおおまゝ若おまゝ
 衆おまゝぶおまゝのおまゝあおまゝらおまゝうおまゝやおまゝ見おまゝとおまゝまおまゝまおまゝくおまゝらおまゝとおまゝんおまゝとおまゝらおまゝうおまゝらおまゝくおまゝ勿おまゝ体おまゝ
 あるおまゝらおまゝうおまゝらおまゝ變おまゝ染おまゝさおまゝるおまゝをおまゝかおまゝのおまゝつおまゝけおまゝおおまゝ日おまゝ々おまゝおおまゝちおまゝ人おまゝのおまゝおおまゝ糸おまゝ
 下おまゝもおまゝあおまゝのおまゝおおまゝ若おまゝ荒おまゝのおまゝ敷おまゝがおまゝ又おまゝんおまゝとおまゝまおまゝまおまゝくおまゝまおまゝのおまゝ時おまゝもおまゝ目おまゝ
 をおまゝまおまゝまおまゝまおまゝずおまゝ帰おまゝておまゝもおまゝたおまゝぐおまゝうおまゝらおまゝくおまゝ一おまゝ折おまゝ角おまゝ形おまゝでおまゝもおまゝあおまゝらおまゝ

ぬおまゝ時おまゝのおまゝやおまゝまおまゝのおまゝどおまゝうおまゝらおまゝくおまゝ胸おまゝをおまゝ焦おまゝしおまゝねおまゝんおまゝおおまゝ死おまゝもおまゝよおまゝ
 もおまゝあおまゝらおまゝまおまゝぬおまゝこおまゝのおまゝナおまゝチおまゝのおまゝまおまゝがおまゝ露おまゝ跡おまゝとおまゝまおまゝのおまゝらおまゝとおまゝまおまゝをおまゝ
 まおまゝだおまゝのおまゝおおまゝ若おまゝ荒おまゝのおまゝあおまゝらおまゝまおまゝどおまゝらおまゝらおまゝぞおまゝやおまゝおおまゝ糸おまゝのおまゝのおまゝそのおまゝ時おまゝもおまゝまおまゝ
 のおまゝ露おまゝ跡おまゝのおまゝよおまゝらおまゝおおまゝ祈おまゝのおまゝ堀おまゝの内おまゝ一おまゝ寸おまゝまおまゝよおまゝとおまゝ埴おまゝ見おまゝのおまゝ
 おおまゝまおまゝのおまゝあおまゝらおまゝまおまゝぐおまゝ口おまゝをおまゝしおまゝ時おまゝおおまゝこのおまゝ幸おまゝ一おまゝこおまゝらおまゝ一おまゝまおまゝ又おまゝ死おまゝのおまゝ志おまゝ
 一おまゝまおまゝぐおまゝとおまゝまおまゝるおまゝまおまゝどおまゝよおまゝらおまゝおおまゝ若おまゝ荒おまゝ必おまゝのおまゝ後おまゝ又おまゝまおまゝまおまゝくおまゝ
 のおまゝまおまゝまおまゝぐおまゝもおまゝ死おまゝすおまゝくおまゝあおまゝらおまゝうおまゝそおまゝのおまゝ時おまゝはおまゝすおまゝまおまゝやおまゝのおまゝあおまゝらおまゝまおまゝナおまゝ
 才おまゝやおまゝとおまゝ人おまゝをおまゝ糸おまゝのおまゝひおまゝくおまゝ又おまゝおおまゝ若おまゝのおまゝがおまゝ観おまゝておまゝ余おまゝ念おまゝおおまゝいおまゝ侍おまゝはおまゝ

丙戌年木子日丁酉四時向番引救中

由ある時急難を救ふ旅行の人彼を益す。○牛馬雞犬の糞
類を死せんとする不用ひて。○男女小兒とも一切法病不用ひて効有
扶桑を類の靈藥あり。△法藥食物一切さし合ふ。△産前小禁る
儲産のせらるや胞衣下さる不奇効あり。

恬憺堂製



紅毛 玉露飲 一名薄荷圓。一包價二匁

○蘭名ホレイチーイ
頭痛肩背
強急齒の痛ある憂る要する存してよ。口中かき咽喉の痛不食又ハ
吞てよ。法眼病あり水小点ト眼胞小ぬすてよ。中暑霍乱あり方胸吐瀉
小兒用ひてよ。小兒痲痺法病痘瘡不用ひてよ。婦人子宮衝逆
かみひ經水不流ふあり。産後血暈あり白湯ナカき臭く。瘡疾かこ
癩癩小用ひて。發せ世外萬病小功能救ふあり。とよも十分一を
記するを。〜〜〜〜〜

救生堂製

救急神效
玉露飲

Handwritten signature or mark at the bottom left of the page.

